図」があることでも知ることが出来る。

以来、江戸時代末期に至るまで、白内障手術は盛んに行われ、江戸時代中期以降の『審視瑤函』『銀海精微』を始めとする支那眼科書にも金鍼法、あるいは貴んで「金」と称した針を用いた手術法が記載されており、これらの白内障手術は眼科に於ける最も重要な手術とされていた。

江戸時代に一流一派を名乗った各眼科流派は、これらの手術法、あるいは手術用具を秘伝中の秘伝とし、手術法についての詳細な記録を固く禁じて、口伝をもってのみ継承するという方法をとったために、当時の白内障手術が具体的にどの様に実施されたのかを知ることは極めて困難なことである。

今回、東京大学図書館に所蔵されている土生玄昌が記した『白内翳手術人名実験録(東京大学図書館蔵書B217299)』に収録された四七症例について、手術眼、手術日、手術時刻、手術回数、手術場所、手術時体位、術式、術後経過についての統計から、江戸時代末期の白内障手術の状況についての考察を加えたい。

(京都府京都市)

福山藩医学校並びに同仁病院と医人たち

江川義雄

明治二年九月に福山藩により開設され、廃藩置県の政治的行政革新により、医育・医療使命を充分発揮しないままに、明治五年十月にその終焉を迎え、郷土の医療史から姿を消した。

広島県内では、西部に広島藩があり、その藩校として修道館があり、それは幾多の変遷を経、名称を改めつつ、明治十年に広島県立広島医学校として再生し、多くの人材を生み、地域の医療・文化に寄与してきた。その一部については、既に第九十回総会で、広島地方の藩医たちとその業績についてふれたところである。今回はいわば、広島県東部地域における日本医学の黎明期を象徴するこの問題について考察しようとするものである。

福山藩は、隣りの安芸藩、岡山藩の間にあって小藩ではあったが、第七代藩主・阿部正弘は若くして、幕政の最高権力者である筆頭老中職になった。

当時日本を代表する学者との接触にも恵まれていたし、阿部家は代々、文教政策を重んじ、特に蘭学については学習に熱心であった。江川太郎左衛門、川路聖謨、岩瀬忠震、勝麟太郎らの推挙で杉純道を蘭学の医官として、江戸・誠之館教授に安政二年に迎えたし、江川の下に福山藩士を銃隊操法学習のために入門させたり、蕃所調書に子弟を入学させている。

幕政の伝統的理念は保守的であり、正弘の洋学志向に対する関心は強くても、保守派の代表格である幕閣、家老、藩臣など反対、抵抗は強く、国内、藩内共に政治的葛藤と国際的危機状況に対応しての苦悩は深刻なものがあった。

明治元年三月、新政府は西洋医術の長所も採用することを宣明した。同年六月に幕府は西洋医学教育機関の医学所を復興して、明治二年二月には医学所、大病院は合併されて、医学校兼病院と改称されるに至ったのである。中央と特に関係の深かった福山藩では、早くから、この新たな体制に対応することが出来たと考えられる。

医学校は深津郡福山西町字築切にあり、同仁病院に併設されて、校長は寺地強平である。院長を補佐したのが寺地の門下である五十川基、小林義直や藩外へ遊学した藩医たちである。使用された医書としては『人身究理』、『博物新論』、『気海観瀾』、『舎密開宗』、『化学訓蒙』、『分析学』、『生理発蒙』、『病学通論』、『和蘭薬鏡』、『扶氏経験遺訓』、『眼科新書』などがある。

福山地方でも、蘭学は世界に通用する言語でないので、これからの医学は蘭語より英語、独乙語に転ずる傾向があり、英語のリーダーを読み始めたという。

生徒は三十六人である。

平川良坪の回想録によれば、病院には藩内六郡の医師殆ど全員出任させ、内科、外科、産科、眼科、接骨科に分担させ、入院、往診も行った。藩主阿部正桓が福山を離れ、東京に移るときき、これを阻止する福山一揆が発生した。その際、火傷・外傷患者数十名を入院させ、四肢切断、弾丸剔出などが行われ、数十名の医員が総動員されて治療に当ったという隆盛を極めた病院・医学校もやがて廃止とな

った。事業漸く緒につかんとして、俄かに消滅したことは残念である。殊に福山のおかれた政治的背景や社会制度の相次ぐ劇変によって、その混乱の中での記録は充分でなく、出来うるかぎり先人の業績を調査し、その偉業をたたえたいものである。

（広島県廿日市市）

島邨俊一小伝

――悲運の精神病学者――

岡田靖雄

島邨俊一は、一八九九年（明治三二年）七月の京都帝国大学医科大学設置にあたり教諭がひきぬかれて京都府医学校が存立の危機にあったとき、ふみとどまって医学校を存立させた人であり、また、島根県に狐憑病の現地調査をした精神病学者である。その姓は、島村とも島邨ともかかれている。谷中霊園にある養父および本人の墓碑は島邨とされ、井關七郎『大日本博士録』第二巻（一九二二年）でも島邨とされるが、学位記ほか公的文書では島村とされており、その他の親族は島村となっている。本人が邨の字をこのまれたようで、ここでは島邨と表記する。名の読みも、『大日本博士録』はトシイチとするが、ドイツ語論文ではシュンイチとなっている。